

# 日本の漫画作品に描かれた考古学者（3）

——1990年代——

櫻井 準也

## Images of Archaeologist in Japanese Comics (3):

The 1990s

SAKURAI, Junya

### Abstract

The archaeologist appeared in Japanese comics which are one of the contemporary popular cultures at many works. In 1990s, the number of works further increases and the genre is also various. Moreover, it is also the features of Japanese comics of the 1990s that the youth comics of the long-term series in which many archaeological sites and archaeologists appear, and that the number of the girls' comics in which an archaeologist appears increases. Furthermore, while the middle-aged male of Safari look like before existed in the archaeologist character of this time, many characters similar to an actual archaeologist came to be seen. This distinction has followed the tendency of the archaeologist character of the second half of the 1980s, and can consider the works based on the research of archaeological site spot, and elaboration of character expression, and also archaeologist has recognized in Japan as that background.

### 要旨

現代のポピュラー・カルチャー（大衆文化）の一つであるわが国の漫画には、多くの作品に考古学者が登場する。その作品数は1990年代になるとさらに増加し、そのジャンルも多岐にわたる。また、数多くの遺跡や考古学者が登場する長期連載の青年漫画が出現すること、考古学者が登場する少女漫画が増加することも1990年代の特徴である。さらに、この時期の考古学者キャラクターには従来のようなサファリ・ルックの中年男性も存在するが、実際の考古学者イメージに近いキャラクターも多くみられ

る。この傾向は1980年代後半からの傾向を踏襲するものであるが、その背景として発掘現場などの詳細な調査に基づく作品制作、人物表現の精緻化、さらにはわが国において考古学者が認知されてきたことが考えられる。

キーワード

ポピュラー・カルチャー (popular culture)

漫画 (Japanese comics)

1990年代 (the 1990s)

考古学者イメージ (images of archaeologists)

青年漫画 (youth comics)

少女漫画 (girls' comics)

## はじめに

漫画は映画やアニメなどともに現代のわが国のポピュラー・カルチャー(大衆文化)を構成する重要な要素となっている(櫻井2014)。以前紹介したようにわが国の漫画作品で考古学者が登場する作品は早くも1950年代に出現している。その後1960年代まで考古学者が登場する作品数はそれほど多くはないが、手塚治虫や石ノ森章太郎といった漫画界の巨匠たちの作品が中心であった1960年代、オカルトブームの影響がみられた1970年代を経て、1980年代前半はそれらの傾向が受け継がれた時期であった。これに対して、1980年代後半になるとギャグ漫画作品やSF漫画作品、さらには映画『インディ・ジョーンズ』シリーズの影響が想定されるアクション漫画作品にも考古学者が登場し、描かれる考古学者像も多様化した(櫻井2016・2017)。さらに、1980年代末に登場し、わが国の30代から40代の考古学研究者にファンが多い『MASTERキートン』シリーズや1970年代から引き続き考古学者が登場する少女漫画作品の存在も注目される。

このような1980年代までの状況に対し、1990年代になると考古学者が登場する漫画作

品がさらに増加する。本稿では前回に引き続き筆者の管見に触れた1990年代の漫画作品を紹介しながら、考古学者が登場する漫画作品やその作品内での考古学者の描かれ方について考察を加えてみたい。

## 1. 考古学者が登場する1990年代の漫画作品

ここでは1990年代に考古学者が登場する漫画作品を紹介する。

まず1990年代以前から継続するシリーズ作品として、諸星大二郎の『妖怪ハンター』シリーズがあげられる。この作品は主人公が異端の考古学者稗田礼二郎であり独特の世界観をもったオカルト漫画作品である。シリーズの中で1990年代の作品として「闇の客人」、「天神さま」、「天孫降臨」、「うつぼ舟の女」、「蟻地獄」、「黄泉からの声」、「海より来るもの」、「産女の来る夜」、「六福神」、「帰還」、「鏡島」、「淵の女」がある<sup>(1)</sup>。このうち考古学的色彩の強い作品として、雑誌『ヤンジャンベアーズ』1992(平成4)年冬の号および1993(平成5)年春の号に掲載された「蟻地獄」がある。この作品は稗田が大学で縄文時代の講義するシーンから始まっている。講義終了後、女子学生から縄文中期の土器に似た

奇妙な土器片を見せられ稗田が彼女と向かった村には巨大な洞窟がある。その中には魔物が住む蟻地獄のような穴があり、その謎を解明するため洞窟が破壊され魔物は去るが、そこにはレジャーランドが作られ縄文館が開館するという内容である。また、雑誌『月刊ベアーズクラブ』1990(平成2)年12月号、1991(平成3)年1月号および『ヤンジャンベアーズ』夏の号に掲載された「天孫降臨」において古墳時代の船やストーンサークルが登場するように、『妖怪ハンター』には考古学的要素が盛り込まれていることが多い。

次に、伝奇SF漫画作品と呼ばれ、雑誌『コミックトム』1986(昭和61)～1990(平成2)年に掲載された星野之宣の『ヤマタイカ』(星野1987～1991)も1990(平成2)年までシリーズが継続している。前回紹介したように古代日本の火の民族に関する壮大な物語であり、火焰土器・銅鐸・遮光器土偶・装飾古墳などが登場する。主人公はアマチュア古代史家の熱雷草作であり、考古学者として西南大学考古学の教授と助手の島伊都子が登場する。この他に考古学者が登場する星野作品として『滅びし獣たちの海』(星野1996)に掲載された「アウトバースト」がある。アマゾンの森林開発に伴ってプレ・インカ時代の黄

金都市(エル・ドラド)が発見されるという内容であるが、ここでは主人公として女性考古学者のメリダ・アルバラード助教授が登場する。さらに、雑誌『コミックトム』1993(平成5)年1月号に掲載された「土の女」(星野2012)では、無人島で調査をする考古学専攻の大学院生浩一が登場する。

この他にSF漫画作品として、1994(平成6)年に雑誌『月刊コミックコンプ』に掲載された広江礼威の『翡翠峡奇譚』(広江2005)があげられる。主人公は帝大考古学教室の研究助手である脇坂伊織で、1935(昭和10)年にメキシコで神殿遺跡を発見して古代神クルカンの封印を解いてしまったが、その力を手に入れるためドイツ第三帝国(ナチス)や旧日本陸軍が登場する。さらに、雑誌『PUTAO』1997(平成9)年7月号～1998(平成10)年6月号に掲載された柴田昌弘の『闇色の枢』(柴田1998)がある。主人公で旅行情報誌の編集者である茂刈希那が青森県での縄文のテーマパーク事業にかかわり不思議な体験をするという内容で、ここでは西湘大学考古学教授の浅沼館彦と西湘大学考古学部学生の市浦浩二が登場する。

これに対し、1990年代にアニメ化され人気を博した探偵漫画作品である、さとうふみや

(1) 『妖怪ハンター』シリーズの1990年代作品は次の通りである。

「闇の客人」『妖怪ハンター地の巻』(初出『月刊ベアーズクラブ』1990年1月号)、「天神さま」『妖怪ハンター天の巻』(初出『月刊ベアーズクラブ』1990年7・8月号)、「天孫降臨」『妖怪ハンター天の巻』(初出『月刊ベアーズクラブ』1990年12月号、1991年1月号、『ヤンジャンベアーズ』夏の号)、「うつぼ舟の女」『妖怪ハンター水の巻』(初出『ヤングベアーズ』1991年冬の号、1992年春・夏・秋の号)、「蟻地獄」『妖怪ハンター地の巻』(初出『ヤンジャンベアーズ』1992年冬の号、1993年春の号)、「黄泉からの声」『妖怪ハンター天の巻』(初出『月刊ベアーズクラブ』1993年8・10・12月号)、「海より来るもの」『妖怪ハンター水の巻』(初出『月刊ベアーズクラブ』1994年2月号)、「産女の来る夜」『妖怪ハンター水の巻』(初出『月刊ベアーズクラブ』1994年8月号)、「六福神」『妖怪ハンター水の巻』(初出『ウルトラジャンプ』1号、1995年)、「帰還」『妖怪ハンター水の巻』(初出『ウルトラジャンプ』2号、1995年)、「淵の女」『妖怪ハンター水の巻』(初出『ウルトラジャンプ』10号、1995年)。ただし、「海より来るもの」、「六福神」、「帰還」、「鏡島」に稗田礼二郎は登場しない。

の『金田一少年の事件簿』シリーズの3作に考古学者が登場する。まず雑誌『週刊少年マガジン』1993（平成5）年36～45号に掲載された「秘宝島殺人事件」（さとう・天樹1994）がある。財宝が眠るとされる悲報島に宝探しに行く話であるが、ここでは以前この島で遺跡調査中に崖から転落して死亡した佐伯考古学会会長の佐伯京助教授が登場する。次に、雑誌『週刊少年マガジン』1997（平成9）年21～27、38・39号に掲載された「魔神遺跡殺人事件」（さとう・天樹1994）にも考古学者が登場する。主人公の金田一少年が先輩の宗像さつきに遺跡発掘のアルバイトに誘われて訪れた、さつきの故郷である魔陣村で起こる呪われた魔神具（銅鏡・銅鐸・銅矛・宝玉）をめぐる殺人事件の話である。ここでは考古学者として、さつきの父親である宗像志郎教授、東城大学の国守秋比古教授、鳥辺野章助手が登場する。最後に、雑誌『週刊少年マガジン』1998（平成10）年44～49号、1999（平成11）年1号に連載された「天草財宝伝説殺人事件」（さとう・天樹1999）にも考古学者が登場する。隠れキリシタンの財宝を探しに金田一少年が天草を訪れる話であるが、ここでは考古学者として考古学助教授の最上葉月が登場し、事件の謎解きに関わっている。

同様に1970年代にアニメ化されて人気となったモンキー・パンチのアクション漫画作品『ルパン三世』の1990年代の作品にも考古学者が登場する。雑誌『WEEKLY 漫画アクション』1999（平成11）年10月12日号～26日号に掲載された「ルパン三世 ナイルに消えた涙」（モンキー・パンチ2000）である。エジプトで発見されたイシス神殿の宝をめぐる物語であるが、ここでは考古学者としてスコット・サード、カーター、ジン、チャールズ教授の4名が登場する。

これに対して、数は少ないものの考古学者

が登場するギャグ漫画作品やコメディ漫画作品では、雑誌『週刊少年サンデー』1990（平成2）年10月増刊号に掲載された椎名高志の「長いお別れ」がある（椎名2008）。主人公の加代子がバイトをしている神社の社務所に現れたのが考古学者の柳国と助手の麦田であり、神社の堂から謎の巫女と遮光器土偶が登場する。土偶は30世紀から来たもので千年に一度開くタイムゲートを使って30世紀に恐竜のフタバスズキリュウを届けるのが任務であるが、柳国と麦田がこれを強奪しようとするという内容である。このようにギャグ漫画では同時期の前嶋昭人の「ハニ太郎」シリーズ（前嶋1995など）のように埴輪や土偶がキャラクターとして登場することが多いが、その際に考古学者も登場することがある。考古学者が登場するラブコメディ漫画作品として雑誌『週刊少年マガジン』1998（平成10）年47号～2001（平成13）年48号に連載された赤松健の『ラブひな』（赤松1999～2002年）がある。主人公で東京大学入学を目指す浪人生浦島景太郎と成瀬川なるをめぐる恋愛物語である。この作品では瀬田という考古学者が登場するが、瀬田は「61話 最果てランアウェー」において太平洋パララケルス島で発掘調査を行っている。

次に、1980年代から考古学者が登場するようになるアクション漫画作品では、前回も紹介した作品で1989（平成元）年41号から1996（平成8）年2号増刊号にかけて雑誌『週刊少年サンデー』に連載された、たかしげ宙（作）・皆川亮二（画）の『スプリガン』（たかしげ・皆川1991～96）がある。主人公の御神苗優は考古学者ではないがスプリガン（超古代文明を封印することを目的とする組織の特殊工作員）であり、20世紀末に不思議な力を持っている超古代の遺跡の争奪戦に大国が介入したため、それを守ることを任務として

いる。また、アクション漫画作品では雑誌『月刊ASUKA』1997(平成9)年春の号～2010(平成22)年12月号に連載された杉崎ゆきの『D・N・ANGEL』(杉崎1997～2011)があり、主人公の中学生丹羽大介の父親丹羽小助が考古学者である。さらに、雑誌『週刊少年ジャンプ』1998(平成10)年14号から連載中の富樫義博の『HUNTER×HUNTER』(富樫1998～)では、主人公のゴン＝フリークスがめざす世界の稀少な事物を追求するハンター試験の試験官であるサトツが遺跡の発掘・修復・保護を行う考古学者である。

これに対し、アクション的要素もあるミステリー漫画作品であり、現在の30代から40代の考古学研究者にファンの多い作品として前回は紹介した浦沢直樹の『MASTER キートン』(勝鹿・浦沢1989～93)がある。この作品は1988(昭和63)年6月5日号～1994(平成6)年6月5日号に雑誌『ビックコミックオリジナル』に掲載されている。主人公の平賀＝キートン・太一が考古学者であるが、それ以外にも多くの考古学者が登場する。1990年代の作品に登場するキートン以外の考古学者<sup>(2)</sup>としては、「白い女神」でキートンのオックスフォード考古学センターの同僚であったアンナ・フサーク・プラマー博士、「イシスの呪い」でエジプト学者でかつてキートンが学生時代に資料整理の手伝いをしていたウィリアム・クーニー教授、「幸運は雨とともに」でキートンの学生時代の友人でイタリアでエルトリア人の遺跡を探しているジェーム

ズ・アシュトンが登場する。また、発掘現場での殺人事件を扱った作品で、キートンが保険会社のオブ(調査員)となる契機が描かれた「オブの生まれた日」では、東ヨークシャー大学教授のスティーブンス、東ヨークシャー大学助教授のスチュワート・アトキンズ、東ヨークシャー大学のパウエル、キートンの大学専任教員への就職にまつわる話である「学者になる日」では、東都大学教授で考古学会会長の藤林教授、東都大学の吉岡助教授、前東都大学講師の北川が登場する。また、キートンの恩師であり、ドナウ文明説を唱えて学会追放されたオックスフォード大学のユーリー・スコット教授が「学者になる日」、「夢を継ぐ者」に登場する。

また、キートンが1980年代末から90年代にかけての漫画作品の中で人気を博した考古学者キャラクターであるとする、1990年代末に登場して現在も人気がある考古学者キャラクターは雑誌『週刊少年ジャンプ』に連載が続いている尾田栄一郎のアドベンチャー漫画『ONE PIECE』(尾田1997～2017)に登場する女性考古学者ニコ・ロビンであろう。この作品にニコ・ロビンが初めて登場するのが1999(平成11)年の雑誌『週刊少年ジャンプ』52号に掲載された「第114話 進路。」においてである。ただし、ここでニコ・ロビンは主人公であるルフィ達の敵である犯罪集団バロックワークスの副社長(最高司令官)ミス・オールサンデーとして登場する。ちなみにニコ・ロビンがルフィ達の仲間となるの

(2) キートン以外の考古学者が登場する1990年代の作品は次の通りである(「白い女神」のみ1989年作品)。

第5巻「白い女神」(初出『ビックコミックオリジナル』1989年9月5日号)、第10巻「イシスの呪い」(初出『ビックコミックオリジナル』1991年7月5日号)、「幸運は雨と共に」(初出『ビックコミックオリジナル』1991年10月5日号)、第12巻「オブの生まれた日」(初出『ビックコミックオリジナル』1992年3月5日号)、第17巻「学者になる日」(初出『ビックコミックオリジナル』1993年12月20日号)、「夢を継ぐ者」(初出『ビックコミックオリジナル』1994年1月5日号)



は、雑誌『週刊少年ジャンプ』2002（平成14）年10号の「第217話『密航者。』」においてである。

さらに、主人公が考古学者ではないにも関わらず様々な遺跡や遺物を題材とした漫画作品シリーズが登場するのも1990年代の特徴であるといえる。その一つが愛・英史（作）、里見桂（画）で雑誌『月刊スーパージャンプ』に長期連載された『ゼロ THE MAN OF THE CREATION』（愛・里見1991～2011）である。主人公は天才贗作者ゼロであり、1990年代の作品には世界中の遺跡や遺物が登場する。具体的には、エジプトやマヤだけではなく、ギリシャ、インカ、中国、シュメール、ヒッタイト、ペルシャ、ヴァイキングの遺跡、さらにはアトランティス、ムー大陸など多岐にわたる。また、それに伴い考古学者が登場する作品が多い<sup>(3)</sup>。具体的に登場した考古学者をあげると、「ロライマの笑う人形」のロバート・スミス、「シューネルの地球儀」のミロドルフ博士（メトロポリタン美術館顧

問）、「甦るアトランティスの謎」のギルビー（バイオニアパーク博物館研究員）、「古代エジプト 幻のピラミッド」のR.H.ロバート（オックスフォード大学教授）とヘンリー（オックスフォード大学助手）、「消えたレムリアの古代裂」のミロドルフ博士（メトロポリタン美術館顧問）、「ムー大陸・秘密の書」のクラーク博士（アンコールワット研究者）、アスコット（ミュンヘン大学考古博物館）、ニコライ博士、トレバー・ロング博士、「古代アフリカ グレート・ジンバブエ」のクラーク教授（ハラール総合大学）、「呪いのミイラ」のルアン・カルマーカ博士、「マヤ神々のキノコ」のフランク博士（メキシコ博物館考古学員）、「シュメールの秘宝」のロッシニ博士、「北京原人 50年目の真実」のロベルト・デニエロ博士（NYセントラル大学）とヘンリー・ウィルソン、「幻の民族ヒッタイト」のマルト教授（レーマベルク大学）とドルフ博士（レーマベルク大学）、「オーパーツ 恐竜土偶の真実」のスコット博士

(3) 考古学者が登場する1990年代の作品は次の通りである。

第2巻「ロライマの笑う人形」（初出『月刊スーパージャンプ』1991年7月号）、第10巻「シューネルの地球儀」（初出『月刊スーパージャンプ』1993年21号）、第11巻「甦るアトランティスの謎」（初出『月刊スーパージャンプ』1994年6号）、第11巻「古代エジプト 幻のピラミッド」（初出『月刊スーパージャンプ』1994年8号）、第12巻「消えたレムリアの古代裂」（初出『月刊スーパージャンプ』1994年12号）、第12巻「ムー大陸・秘密の書」（初出『月刊スーパージャンプ』1994年16号）、第13巻「古代アフリカ グレート・ジンバブエ」（初出『月刊スーパージャンプ』1994年18号）、第13巻「呪いのミイラ」（初出『月刊スーパージャンプ』1994年23号）、第15巻「マヤ神々のキノコ」（初出『月刊スーパージャンプ』1995年12号）、第16巻「シュメールの秘宝」（初出『月刊スーパージャンプ』1995年16号）、第16巻「北京原人 50年目の真実」（初出『月刊スーパージャンプ』1995年17号）、第16巻「幻の民族 ヒッタイト」（初出『月刊スーパージャンプ』1995年18号）、第16巻「オーパーツ 恐竜土偶の真実」（初出『月刊スーパージャンプ』1995年19号）、第18巻「古代エジプト 呪いの書」（初出『月刊スーパージャンプ』1996年10号）、第19巻「マヤからの死の使い」（初出『月刊スーパージャンプ』1996年14号）、第21巻「先人の謎—太古からのメッセージ」（初出『月刊スーパージャンプ』1997年4号）、第24巻「夏 中国伝説の王朝」（初出『月刊スーパージャンプ』1998年3号）、第25巻「ヴァイキングの秘宝」（初出『月刊スーパージャンプ』1998年10号）、第26巻「幻のアトランド大陸」（初出『月刊スーパージャンプ』1998年14号）、第26巻「神が降りる場所」（初出『月刊スーパージャンプ』1998年17号）、第29巻「ティアル（王冠）—古代ペルシャの秘宝」（初出『月刊スーパージャンプ』1999年9号）、第30巻「編布—日本最古の布」（初出『月刊スーパージャンプ』1999年15号）

(メトロポリタン美術館)、「古代エジプト呪いの書」のフリック(ドイツ古代博物館学芸主任)、「マヤからの死の使い」のシュメリット・ロードス助教授とチェック・バグ助手、「先人の謎—太古からのメッセージ」のダニエル博士とケーシー博士、「夏 中国伝説の王朝」の李洪運(上海人民博物館学芸員)、「ヴァイキングの秘宝」のルドント博士、「幻のアトランド大陸」のヘンリー・ケラー博士(ニューヨークアカデミー考古学研究所)とクラーク(ニューヨーク州立大学考古学部教授)、「神が降りる場所」のフラレオーニ・スタイント博士、マルコ助手、ロレンツィオ博士、ミランドラ教授、「ティアール(王冠)—古代ペルシャの秘宝」のニコラ・ロラン博士、「編布—日本最古の布」の山下武士と金重鉄太郎である。

同様に主人公が考古学者ではないが複数の考古学者が登場する長期連載作品として、雑誌『週刊ビッグコミックスピリッツ』に連載された細野不二彦の『ギャラリーフェイク』がある(細野1992~2016)<sup>(4)</sup>。主人公の藤田玲司はニューヨーク・メトロポリタン美術館の元学芸員で現在画廊を経営している。1990年代の作品に登場する考古学者は、「海底に眠る夢」(細野1994)の水中考古学者のラモス教授(マイアミ大学)、「ナイル盗掘ツアー」(細野1994)および「黄金郷への誘い」(細野1995)のエジプト考古学者の吉岡助教授(Y大学考古学科)、「縄文土面」(細野1995)の亀ヶ岡(岩手県A市の埋蔵文化財センター職員)、「宝探し同好会」の松田(元大学の考古学サークル所属)である。

これに対し、わが国の少女漫画作品では1990年代になると考古学者が登場する作品がさらに増加する。まず、雑誌『ぶ〜け』1991(平成3)年1月号に掲載された山岸涼子の「顔の石」(山岸2010)がある。主人公が嫁ぎ先で平山の前妻の霊やポルターガイスト現象に悩むという話であるが、主人公の夫が考古学を教える大学教授の平山である。また山岸作品としては、雑誌『LaLa』1994(平成6)年7月号~1995(平成7)年7月号および雑誌『月刊コミックトム』1996(平成8)年5月号~11月号に掲載され、ツタンカーメン王墓を発見したハワード・カーターを主人公にした伝記漫画『ツタンカーメン(原題 封印)』がある(山岸1995~97)<sup>(5)</sup>。本作品では、ハワード・カーター以外にも、カーナボン卿やエジプト考古局長のマスベロ、さらにカーターの恩師であるピートリー、エジプト考古学者のセオドア・デビスやエドワード・アイルトンが登場する。

さらに山岸作品以外にも多くの少女漫画作品に考古学者が登場する。まず、雑誌『セリエミステリー』1994(平成6)年12月号に掲載された青池保子の「かるたご幻想」(青池1998)がある。1929年のカルタゴでの発掘調査をめぐる物語であり、主人公のケイトとともに発掘を行うスコット助教授と助手のジョンが登場する。次に、雑誌『少女コミック』1995(平成7)年3号~2002(平成14)年13号に掲載されたのが篠原千絵の『天は赤い河のほとり』(篠原1995~2002)がある。主人公の鈴木夕梨が紀元前14世紀のヒッタイト帝国にタイムスリップする物語であるが、2002

(4) 考古学者が登場する1990年代の作品は次の通りである。

第3巻「海底に眠る夢」(1994)、第4巻「ナイル盗掘ツアー」(1994)、第6巻「黄金郷への誘い」、第18巻「似た者どうし」(2000)

(5) 本作品の文庫版では、吉村作治氏の解説が掲載されている。

(平成14)年に出版された『天は赤い河のほとり FAN BOOK～イシュタル文書～』(篠原2002)では、主人公の恋人であった氷室聡が教授となって皇妃となった夕梨すなわちイシュタルについて記載したイシュタル文書(粘土板)を発掘している。また、雑誌『LaLa』1996(平成8)年2月号～2005(平成17)年4月号に連載された津田雅美の『彼女彼女の事情』(津田1996～2005)は進学校の優等生であるが実は虚栄心の塊である主人公宮沢雪野の恋愛と成長の物語であり、考古学者として佐倉椿が登場する。彼女は主人公と同級生で世界中の古代遺跡を巡り、エジプトの大学に通ったのちアメリカで大学教授になっている。さらに、坂田靖子の『バジル氏の優雅な生活』(坂田1996・97)も興味深い作品である。この作品は、19世紀のイギリス貴族バジル・ウォーレン卿の生活を描いたもので、発掘好きな公爵夫人(変人ビクトリア)としてビクトリア・ランバインが「ウィッシュ・ボーン」や「エジプシャン・スタイル」の章に登場する。さらに、雑誌『少女コミックcheese!』1998(平成10)年12月号～2004(平成16)年12月号に掲載された北川みゆきの『罪に濡れたふたり』(北川1996・97)は、主人公の鈴村香純と明徳院大学学生でイタリア、フォロ・ロマーノ近くの遺跡発掘現場でアルバイトをしていた鈴村由貴(実は香純の弟)と恋に落ちる物語で考古学者としてT大学の浅田教授が登場する。さらに、1980年代のアニメ作品では『魔法のプリンセスミンキーモモ』が著名であるが(櫻井2014)、1990年代には魔法少女漫画作品の中にも考古学者が登場する。その作品は雑誌『なかよし』1996(平成8)年6月号～2000(平成12)

年8月号に連載されたCLAMPの『カードキャプターさくら』(CLAMP 1996～2000)であり<sup>(6)</sup>、主人公である木之本桜の父親藤隆が塔和大学で考古学を教えている考古学者である。

最後に、1990年代末になるとわが国の発掘現場を舞台にした漫画作品が登場する(櫻井2015)。それが、もりたじゅんの『大変愛』(もりた1999)であり、主な登場人物は発掘調査現場で働く杉下泰子、向坂所長、山川萌、山川慎一である。遺跡発掘現場の日常の中で登場人物の過去や恋愛が描かれているが、最終的に泰子が向坂に、萌が慎一に求婚され、発掘現場内で二組の恋愛が成立するという内容である。

このように考古学者が登場する1990年代の漫画作品は基本的に1980年代後半以降の流れを踏襲しているが、世界の遺跡や考古学者が頻繁に登場する長期連載作品が登場すること、少女漫画で考古学者が登場する作品が増えること、実際の発掘調査現場が舞台の漫画が登場することなど、1990年代になると考古学者が登場する日本の漫画作品に新たな傾向がみられることわかる。

## 2. 1990年代のわが国の考古学界の動向

1980年代の後半にはバブル景気によって開発が急増し、それに伴ってわが国の発掘調査件数は急増したが、1990年代はじめにはバブル経済が崩壊し、景気が一気に減速した。しかし、既に開発計画や建築計画が決定しているプロジェクトも多く、バブル崩壊後すぐに発掘調査件数が減少することはなかった。そ

(6) 『カードキャプターさくら』は2016(平成28)年より新たなシリーズ(「クリアカード編」)が雑誌『なかよし』に連載されている。



れを示すように、わが国の一年間の発掘調査件数は1996(平成8)年の約12,000件がピークであり、その後急激に減少し、1999(平成11)年には6,000件台となった。しかし、2000(平成12)年には回復し、その後の発掘調査件数は年間8,000件程度となっている。

また、この時期も全国各地の発掘調査によって多くの成果が得られている。まず、1991(平成3)年には鳥取県上淀廃寺で白鳳時代の仏教壁画が出土している。翌1992(平成4)年に青森県三内丸山遺跡(縄文時代)の発掘調査が始まり二年後の1994(平成6)年には保存が決定され「縄文ブーム」を引き起こした。1996(平成8)年には鳥根県加茂岩倉遺跡(弥生時代)で多量の銅鐸が発見され、1998(平成10)年には奈良県黒塚古墳の調査成果が公表されて邪馬台国論争が再燃している。また、毎年前年度に調査された全国の遺跡の中で特に注目される遺跡の調査成果を公表する場である文化庁主催の『新発見考古速報展』が開催され、全国各地を巡回するようになったのが1995(平成7)年である。

このように、1990年代はわが国のバブル経済崩壊の影響を受けながらも全国的に遺跡の発掘調査が盛んに実施された時期であり、多くの成果が得られている。また、従来のような行政が中心となって実施される発掘調査に対し、関東地方を中心に民間の発掘調査会社が台頭し、わが国の発掘調査システムが変化した<sup>(7)</sup>。さらに、わが国がユネスコの世界遺産条約に加盟したのが1992(平成4)年のことであり、吉野ヶ里遺跡や三内丸山遺跡にみられるように遺跡を整備して観光や地域振興に活用しようという動きが本格化したのもこの時期である。

### 3. 1990年代の漫画作品に描かれた考古学者

遺跡や考古学がわが国で身近な存在となったことにより、1980年代には考古学者が登場する漫画作品が増加し、そのジャンルも広がってきたが、1980年代後半になると考古学者の描かれ方はそれまでのステレオタイプ化された考古学者像ではなく、実際の考古学者に近いキャラクターも登場するようになる(櫻井2017)。また、少女漫画作品に美形の青年考古学者が登場し、『MASTER キートン』(勝鹿・浦沢1989~93)の連載が始まるなど、わが国の漫画界と考古学の新たな関係は1990年代に引き継がれていった。ここでは、1990年代の漫画作品に登場する考古学者像について検討してみたい。

まず、1970年代から継続するシリーズとしてオカルト漫画作品である諸星大二郎の『妖怪ハンター』シリーズがあるが、主人公の穂田は細身で肩までかかる長髪、黒いスーツとネクタイ姿の男性であり、考古学者というよりは民俗学者や宗教学者のイメージに近い。また、SF漫画作品では、1980年代後半から連載された星野之宣の『ヤマタイカ』(星野1987~1991)の主人公はアマチュア古代史家の熱雷草作である。考古学者として西南大学考古学の教授と助手の島伊都子が登場するが、教授は眼鏡をかけ、発掘調査では作業服を着て帽子を被り、首にタオルを巻いた姿であるのに対し、助手の伊都子はTシャツにオーバーオール姿である。同じ星野作品である「アウトバースト」(星野1996)では、主人公として女性考古学者のメリダ・アルバラード

(7) 大学の考古学専攻の学生が自治体の埋蔵文化財担当職ではなく、民間会社への就職を目指す傾向がみられるようになったのがこの時期である。

助教授が登場する。彼女は細身で長髪の美人であるが、アマゾンの密林での調査の際にTシャツにパンツ姿、スニーカーにリュックを背負った軽装である点が気になる。「土の女」(星野2012)では、無人島で調査をする考古学専攻の大学院生浩一が登場するが、彼はやや長髪でシャツにジーンズ・スニーカー姿の好青年で首にタオルをかけており、当時の大学院生のイメージに近い。さらに、広江礼威の『翡翠峡奇譚』(広江2005)の主人公で戦前の帝大考古学教室の研究助手である脇坂伊織は髪をセンター分けした目の大きな童顔の青年で、白い開襟シャツに大きめのジャケット姿で登場しているが、これは当時の時代に即した姿である。また、柴田昌弘の『闇色の柩』(柴田1998)では、西湘大学考古学教授の浅沼館彦と西湘大学考古学部学生の市浦浩二が登場する。浅沼教授は頭が禿げ気味であるが長髪を後ろで束ね、眼鏡をかけた老人でシャツにジャケット姿であり、市浦は長髪に眼鏡をかけ頭にバンダナを巻き、シャツに迷彩柄のベストとズボン姿である。二人とも従来の考古学者イメージと異なるが、特に市浦は考古学者というよりトレジャー・ハンターである。

これに対し、1990年代にアニメ化され人気を博した探偵漫画作品である、さとうふみやの『金田一少年の事件簿』シリーズの中で「秘宝島殺人事件」(さとう・天樹1994)に登場する佐伯京助教授はやや長髪で作業着を着た優しそうな男性である。他の仲間とは異なりトレジャー・ハンターのイメージはなく、宝を国に寄付しようとして殺されてしまう。さらに、「魔神遺跡殺人事件」(さとう・天樹1994)に登場する宗像教授は眼鏡をかけたやさしそうな男性で、シャツやTシャツにジャケット、あるいはカーディガン姿で登場する。これに対し、国守教授はスーツにベス

ト、ネクタイ姿の聡明そうな中年男性、鳥辺野助手はやや長髪でシャツにセーター姿の若い男性である。最後に、「天草財宝伝説殺人事件」(さとう・天樹1999)に登場する考古学助教授の最上葉月は長髪で眼鏡をかけた若い女性でシャツやトレーナーにベスト姿で登場している。このように『金田一少年の事件簿』シリーズに登場する考古学者は実際の考古学者と比較してそれほど違和感はない。これに対し、『金田一少年の事件簿』シリーズと同様に人気作品であるモンキー・パンチのアクション漫画『ルパン三世』の「ナイルに消えた涙」(モンキー・パンチ2000)に登場するスコットは背が高くやや長髪の美形男性で同僚のカーターは口髭に眼鏡をかけた中年男性、ジンは不二子にナンパを試みる若い男性である。さらに、チャールズ教授は小柄で口髭に頭が禿げた男性である。こちらもスコットがイケメンであり、4人ともサファリ・ルック(軍服の可能性もある)にブーツ姿である以外はそれほど違和感はない。

次に、ギャグ漫画作品やコメディ漫画作品では、椎名高志の「長いお別れ」(椎名2008)に登場する考古学会の異端児柳国は眼鏡をかけた老人でスーツにネクタイ姿、麦田も長髪で黒いスーツ姿であり『妖怪ハンター』シリーズの稗田礼二郎を彷彿とさせる。また、ラブコメディ漫画である赤松 健の『ラブひな』(赤松1999～2002)に登場し、太平洋の島で発掘調査を行っている瀬田は眼鏡をかけ黒いシャツにネクタイ、サスペンダー付きの黒いズボン、その上に白衣を着て常に煙草を吸っている変わった人物である。アクション漫画作品では、前回も紹介したたかしげ宙(作)・皆川亮二(画)の『スプリガン』(たかしげ・皆川1991～1996)があるが、主人公の御神苗優は考古学者ではなくスプリガンである。普段は革ジャン姿の青年であるが、戦闘

時にはA・Mスーツ（アーマードマッスルスーツ）を着ている。杉崎ゆきるの『D・N・ANGEL』（杉崎1997～2011）では主人公の父親である丹羽小助が考古学者であるが、小助は独特の髪型や顔つき、服装ともに主人公の丹羽大介によく似ており、考古学者のイメージはまったくない。さらに、富樫義博の『HUNTER×HUNTER』（富樫1998～）では、主人公のゴン＝フリークスの試験官のサトツが遺跡の発掘・修復・保護を行う考古学者であるが、サトツは髪をセンター分けしトランプのような口髭が特徴的なスーツにネクタイ姿の紳士的な男性である。このように、ギャグ漫画作品やコメディ漫画作品、さらにアクション漫画作品では実際の考古学者とはかけ離れたキャラクターが多いことがわかる。

その一方で、前回は紹介した浦沢直樹の『MASTER キートン』シリーズ（勝鹿・浦沢1989～93）の主人公である平賀＝キートン・太一はオックスフォード大学卒で胡桃沢大学非常勤講師、大手保険会社ロイズのオブ（調査員）でありながら元SAS（イギリス特殊空挺部隊）のサバイバル教官（マスター）という異色の経歴の持ち主である。体型は細身で顔つきは特に美形ではなく前髪の一部を垂らしているのが特徴で、服装は上下揃いのスーツにネクタイ姿である。また、キートン以外の考古学者も多く登場する。「白い女神」のアンナ・フサーク・ブラマー博士はメガリスを開発事業から守るため一人銃を持って立てこもる勇猛な女性で長髪で長袖シャツにジーンズ姿、「イシスの呪い」のエジプト学者ウィリアム・クーニー教授は長身で眼鏡をかけスーツにネクタイ姿の温和そうな男性、「幸運は雨とともに」のキートンの学生時代の友人ジェームズ・アシュトン小太りで丸眼鏡をかけた優しそうな男性でTシャツや半袖シャツとズボン姿で発掘を行っている。また、

「オプの生まれた日」の東ヨークシャー大学教授のステーブンスは眼鏡をかけた太った老人でスーツにループタイ姿、助教授のスチュワート・アトキンズは大柄でシャツにズボン姿のいかにも自信家そうな男性、パウエルは眼鏡をかけ、シャツにカーディガンを着た神経質そうな男性である。さらに、「学者になる日」、「夢を継ぐ者」に登場するキートンの恩師のオックスフォード大学ユーリー・スコット教授は小柄の痩せた体型で眼鏡をかけ、スーツとネクタイ姿の温和そうな老人である。これに対し、日本の考古学者では「学者になる日」に登場する東都大学教授で考古学会会長の藤林教授は細身で長顔、頭髪がやや後退した老人でスーツにネクタイ姿、吉岡助教授は丸顔に眼鏡をかけ頭髪がやや後退したスーツ姿の男性、北川はウエーブのかかった髪で眼鏡をかけた柄シャツにジャケット姿の男性である。このように『MASTER キートン』に登場する考古学者の姿は様々であるが、彼らはそれぞれのストーリーやキャラクター設定に合った風貌や服装をしているといえる。

これに対し、愛 英史（作）、里見 桂（画）の『ゼロ THE MAN OF THE CREATION』シリーズ（愛・里見1991～2011）は実に多くの考古学者が登場する作品である。登場する考古学者の多くは白人の考古学者であるが、それ以外では「古代アフリカ グレート・ジンバブエ」のクラーク教授（ハラーレ総合大学）が黒人男性、「夏 中国伝説の王朝」の李洪運（上海人民博物館学芸員）が中国人、「編布—日本最古の布」の山下武士と金重鉄太郎（日本考古学会の重鎮）が日本人である。また、これらの考古学者はすべて男性であり、肩書は大学の教授や助教授、博物館や美術館の関係者（メトロポリタン美術館が多い）が主体である。登場する考古学者の描か

れ方については、興味深いことに多くの考古学者が口髭と顎鬚を生やしており、これに口髭のみの考古学者を加えると、登場するほとんどの考古学者が髭をはやしていることになる。また、頭が禿げていたり眼鏡をかけている考古学者も目立つが、太った考古学者など体型的に特徴のある人物は存在しない。さらに服装については、ほとんどがスーツにネクタイ姿（ループタイの考古学者も若干存在する）であり、発掘現場や野外調査ではサファリ・ルックや作業服姿の考古学者が多い。他にはベスト姿（「オーパーツ 恐竜土偶の真実」のスコット博士、「幻のアトランド大陸」のヘンリー・ケラー博士）や帽子にジャンパー姿（「ヴァイキングの秘宝」のルドント博士）がいるが、革のジャケットに帽子というインディ・ジョーンズのような出で立ちの考古学者（「ロライマの笑う人形」のロバート・スミス）も存在する。このように『ゼロ THE MAN OF THE CREATION』シリーズには多くの考古学者が登場するが、彼らには共通点がある。それは髭を生やし普段はスーツ姿で発掘調査ではサファリルックや作業着姿の中年男性であるという点であり、かなりステレオタイプ化された考古学者像であるといえる。

同様に長期連載で複数の考古学者が登場する細野不二彦の『ギャラリーフェイク』（細野1992～2016）に登場する考古学者については「海底に眠る夢」に登場するラモス教授は水中考古学者ということもあり、大柄で長髪に顎鬚、左目に眼帯をつけ服装はタンクトップに半ズボン姿、あるいはオーバーオール姿で筋トレを欠かさない肉体派の男性である。見た目はトレジャー・ハンターか海賊のようで一般の考古学者イメージとは大きく異なる。また、ラモス教授も登場する「ナイル盗掘ツアー」や「黄金郷への誘い」に登場する

吉岡助教授は、髪をセンター分けし口髭を生やした太った中年男性で服装は半ズボンのサファリ・ルックにサファリ帽を被っている。テレビタレントとして有名になったという言動からもモデルが吉村作治氏であることは明らかである。「縄文土面」の亀ヶ岡は岩手県A市の埋蔵文化財センター職員であり、より多くの発掘調査を実施するために出土品を売買していたという人物である。細身で眼鏡をかけた中年男性で発掘現場ではヘルメットにダウンジャケット、室内ではスーツにネクタイ姿であり、地方で発掘調査に従事する行政の職員のイメージである。また、考古学者とは言えないがかつて大学の考古学サークルに所属していた「宝探し同好会」の松田も細身で眼鏡をかけた中年男性であり、容貌は亀ヶ岡に似ている。

次に、少女漫画では山岸涼子の「顔の石」（山岸2010）の平山が考古学を教える学者肌の大学教授であるが、眼鏡をかけた小太りのさえない男性でポロシャツにスーツ姿である。また、山岸作品では伝記漫画『ツタンカーメン（原題 封印）』（山岸1995～97）の主人公がハワード・カーターであるが、それ以外にもカーナボン卿やエジプト考古局長のマスペロ、さらにカーターの恩師であるピートリー、エジプト考古学者のセオドア・ディビスやエドワード・アイルトンが登場する。カーターは長身で美形の青年であるが、シャツにスーツ姿、シャツにサスペンダー付きズボンにゲートルを巻き帽子を被った姿で登場することが多い。これに対し、ピートリーは口髭を生やした老人でシャツにサスペンダー付きズボン、サファリ帽を被った姿、ディビスはカイザー髭を生やし首にマフラーを巻き、スーツに短いズボン、ブーツに帽子を被った姿で発掘調査を指揮している。さらに、青池保子「かるたご幻想」（青池1998）ではスコ



ット助教授と助手のジョンが登場するが、スコットは美形の青年、ジョンは眼鏡をかけた青年で二人ともサファリ・ルックである。両作品とも考古学者の容貌や服装には1920年代のエジプトという設定が考慮されていることがわかる。

また、少女漫画では髭を生やしていない美形の男性が登場するのが定番であるが、篠原千絵の『天は赤い河のほとり FAN BOOK～イシュタル文書～』（篠原2002）の氷室教授は口髭・顎鬚を生やし、作業服を着て発掘調査を指揮する美形の男性であり若干異なる。北川みゆきの『罪に濡れたふたり』（北川1996・97）に登場する明徳院大学学生でイタリア、フォロ・ロマーノ近くの遺跡発掘現場でアルバイトをしていた鈴木由貴は長髪で美形の若い男性であるが、浅田教授は眼鏡をかけた優しそうな男性で研究室ではスーツにネクタイ、白衣を着ている。これに対し、女性考古学者では津田雅美の『彼氏彼女の事情』（津田1996～2005）に登場する佐倉椿は世界中の古代遺跡を巡り、エジプトの大学に通ったのちアメリカで大学教授になっている。彼女は髪がショートカットで高校時代は比較的大人しそうな女性であったが、成人後は積極的な女性に変貌している。また、考古学者ではないが坂田靖子の『バジル氏の優雅な生活』（坂田1996・97）の発掘好きな公爵夫人（変人ビクトリア）は細身で常に帽子にドレス姿でいかにも貴族の令嬢という雰囲気であるが、エジプトに渡って遺跡をめぐるなど好奇心旺盛の女性である<sup>(8)</sup>。このように、少女漫画に登場する女性考古学者には活発で好奇心旺盛のイメージがあるようである。また、1990年代の魔法少女漫画作品の中でも人気があるCLAMPの『カードキャプターさく

ら』（CLAMP 1996～2000）でも主人公の父親である木之本藤隆が塔和大学で考古学を教えている考古学者である。藤隆は二人の子どもを育てる父親で、美形で眼鏡をかけた優しそうな男性である。眼鏡をかけていることや一軒家の地下が書庫になっているあたりが学者らしさを演出しているが、実際の考古学者とのギャップが大きい。

最後に、1990年にはわが国の発掘現場を舞台にした漫画である、もりたじゅんの『大恋愛』（もりた1999）も注目される作品である（櫻井2015）。主人公の杉下泰子は28歳の発掘調査員、向坂は泰子の上司、山川萌は68歳の未亡人の作業員、山川慎一は70歳の妻を亡くした作業員という設定である。彼らの服装は、作業着姿で頭にタオルを巻き長靴を履いた調査員、農作業用の帽子に割烹着姿の女性作業員など実際の発掘現場でありそうな服装でまったく違和感がない。発掘調査の手順や使用される道具も含め、作者がわが国の遺跡の発掘調査に精通していることがわかる。

## 4. まとめ

前回指摘したように、1980年代後半から考古学者が登場する漫画作品が増加し、そのジャンルも広がってきたが1990年代になってもこの傾向は続いている。それを裏付けるように、1990年代には主人公ではないものの『金田一少年の事件簿』、『ルパン三世』、『HUNTER×HUNTER』、『カードキャプターさくら』、『ONE PIECE』などの人気漫画に考古学者が登場している。また、この時期には現在のわが国の30代から40代の考古学研究者にファンが多い『MASTER キートン』（勝鹿・浦沢1989～93）、あるいは『ゼロ THE

(8) 発掘好きのためアフリカでミイラ7体、原人の骨40体、動物の骨3体を掘り出したとされている。



MAN OF THE CREATION』(愛・里見1991～2011)や『ギャラリーフェイク』(細野1992～2016)のように遺跡や遺物が頻繁に登場する青年漫画作品がみられ、その結果考古学者が登場する作品の数が増加している。さらに、山岸涼子、青池保子、篠原千絵などの作品にみられるように少女漫画作品に考古学者が登場する機会が多くなったことや『大変愛』(もりた1999)のように実際の発掘現場がそのまま描かれる作品が登場したことも特筆すべき傾向である。

1990年代の漫画作品に登場する考古学者像については、以前のように太った体型で禿げ頭、眼鏡をかけ普段はスーツ姿、発掘調査などでは作業着やサファリ・ルックで登場する中年男性というイメージは1990年代になっても相変わらず認められる。しかし、考古学や発掘調査に関する詳細な調査に基づいて制作される作品が増加し、人物表現も緻密になったことなどに伴って実際の考古学者に近い姿で描かれる作品が増え、登場する考古学者に対して違和感を感じない作品も多くなってきている。また、その一方でギャグ漫画作品、コメディ漫画作品、アクション漫画作品などには現実離れた考古学者が登場している点も指摘できる。

このように、考古学者が登場する1990年代の漫画作品は基本的に1980年代後半以降にみられる傾向を踏襲しながらも新たな傾向がみられることがわかる。

## 参考文献

愛 英史 (作)・里見 桂 (画)『ゼロ THE MAN OF THE CREATION』第1～78巻、集英社、1991～2011年(初出『月刊スーパージャンプ』1990年3月号～2011年21・22合併号)  
 青池保子「かるたご幻想」『ドラッヘンの騎士』秋田書店、1998年(初出『セリエミステ

リー』1994年12月号)  
 赤松 健『ラブひな』講談社、1999～2002年(初出『週刊少年マガジン』1998年47号～2001年48号)  
 尾田栄一郎『ONE PIECE』、集英社、1997～2017年(初出『週刊少年ジャンプ』1997年34号～：連載中)  
 勝鹿北星(作)・浦沢直樹(画)『MASTER キートン』小学館、1989～94年(初出『ビッグコミックオリジナル』1988年6月5日号～1994年6月5日号)  
 北川みゆき『罪に濡れたふたり』小学館、1999～2004年(初出『少女コミック cheese!』1998年12月号～2004年12月号)  
 CLAMP『カードキャプターさくら』講談社、1996～2000年(初出『なかよし』1996年6月号～2000年8月号)  
 坂田靖子『バジル氏の優雅な生活』白泉社、1996・97年  
 櫻井準也『考古学とポピュラー・カルチャー』同成社、2014年  
 櫻井準也「遺跡調査の社会学—漫画と考古学—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』第26号、2015年  
 櫻井準也「日本の漫画作品に描かれた考古学者(1)—1950～70年代—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』第28号、2016年  
 櫻井準也「日本の漫画作品に描かれた考古学者(2)—1980年代—」『尚美学園大学総合政策研究紀要』第29号、2017年  
 さとうふみや(画)・天樹征丸(案)「秘宝島殺人事件」『金田一少年の事件簿』第5・6巻、講談社、1994年(初出『週刊少年マガジン』1993年36～45号)  
 さとうふみや(画)・天樹征丸(案)「魔神遺跡殺人事件」『金田一少年の事件簿』第25・26巻、講談社、1997年(初出『週刊少年マガジン』1997年21～27、38・39号)  
 さとうふみや(画)・天樹征丸(案)「Case3 天草財宝伝説殺人事件」『金田一少年の事件簿』講談社、1999年(初出『週刊少年マガジン』1998年44～49号、1999年1号)  
 椎名高志「長いお別れ」『(有)椎名百貨店』小学館文庫、2008年(初出『週刊少年サンデー』1990年10月増刊号)  
 柴田昌弘『闇色の柩』白泉社、1998年(初出『PUTAO』1997年7月号～1998年6月号)  
 篠原千絵『天は赤い河のほとり』小学館、1995

- ～2002年(初出『少女コミック』1995年3号～2002年13号)
- 篠原千絵『天は赤い河のほとり FAN BOOK ～イシュタル文書～』小学館、2002年
- 杉崎ゆきる『D・N・ANGEL』角川書店、1997～2011年(初出『月刊ASUKA』1997年春の号～2010年12月号)
- たかしげ宙(作)・皆川亮二(画)『スプリガン』小学館、1991～96年(初出『週刊少年サンデー』1989年41号～96年2月増刊号)
- 津田雅美『彼氏彼女の事情』白泉社、1996～2005年(初出『LaLa』1996年2月号～2005年4月号)
- 富樫義博『HUNTER×HUNTER』集英社、1998～2017年(初出『週刊少年ジャンプ』1998年14号～：連載中)
- 広江礼威『翡翠峡奇譚』小学館、2005年(初出『月刊コミックコンプ』1994年)
- 星野之宣『ヤマトイカ1～6』潮出版社、1987～1991年(初出『コミックトム』1986年1号～1991年4月号)
- 星野之宣『土の女』『血引きの岩』朝日新聞社、2012年(初出『コミックトム』1993年1月号)
- 星野之宣『アウトバースト』『滅びし獣たちの海』スコラ、1996年
- 細野不二彦『ギャラリーフェイク』小学館、1992～2016年(初出『週刊ビックコミックスピリッツ』1992年～2005年：不定期)
- 前嶋昭人『ハニ太郎です。』ポプラ社、1995年
- 森本和男『遺跡と発掘の社会史』彩流社、2001年
- モンキー・パンチ『ナイルに消えた涙』『ルパン三世y』双葉社、2000年(初出『WEEKLY漫画アクション』1999年10月12日号～10月26日号)
- 諸星大二郎『妖怪ハンター地の巻』集英社文庫、2005年
- 諸星大二郎『妖怪ハンター天の巻』集英社文庫、2005年
- 諸星大二郎『妖怪ハンター水の巻』集英社文庫、2005年
- もりたじゅん『大変愛』集英社、1999年(初出『YOU』No.9、11号、1997年)
- 山岸涼子『ツタンカーメン(原題 封印)』白泉社、1995～97年(初出『LaLa』1994年7月号～1995年7月号、『月刊コミックトム』1996年5月号～11月号)
- 山岸涼子『顔の石』『常世長鳴鳥』潮出版社、2010年(初出『ぶ～け』1991年1月号)
- 若狭 徹『だれのための考古学か 考古学と現代社会』『はじめて学ぶ考古学』有斐閣、2011年

